

〔源平盛衰記三十四〕東國兵馬汰并佐々木賜生倅附象王太子事

高綱略○中 由井ノ濱ニ打出テ聞ケレバ、大勢ハ大底昨日夜部ニ鎌倉ヲ出タリト云、サテハ駿河國

浮島原ノ邊ニテハ追付ナント思テ、十七騎ニテ打テ、殿原殿原トテ、稻村腰越、片瀬川砥上原、八松原馳過テ、相模河ヲ打渡、大磯、小磯、逆和宿、湯本、足柄越過テ、引懸引懸打程ニ、其日ハ二日路ヲ一日路ニ著、河宿ニ著ニケリ、尋レバ案ニ違ハズ、大勢駿河國浮島原ニ引タリト云、

〔曾我物語八〕うきしまがはらの事

さても御れうはうきしまがはらに、御ぎのよし承る、そがきやうだいも、いそぎをつ、き奉りぬ、うきしまがはらとをりけるに、かのはらのむかしは海にてありけるに、大國よりあしたか山といふ山、ふじにたけくらべせんとて、きたりけるを、ごんげんけくづし給ひければ、その山海にうきて、今のうきしまがはらになり略○下

〔大平記二〕俊基朝臣再關東下向事

明霞ニ松見ヘテ、浮島ガ原ヲ過行バ、鹽干ヤ淺船浮テ、ヲリ立田子、自モ、浮世ヲ遠ル車返シ、竹、下道行ナヤム、略○下

〔東關紀行〕浮島が原は、いづくよりもまさりてみゆ、北はふじの麓にて、西東へはるくとながき沼あり、布をひけるがごとし、山のみどり影を浸して、空も水もひとつ也、蘆かり小舟所々に棹さして、むれたる鳥おほくさはぎたり、南は海のおもて遠く見渡されて、雲の波煙の浪いとふかきながめなり、すべて孤島の眼に遮るなし、わづかに遠帆の空につらなれるをのぞむこなたかなたの眺望、いづれもとりに心に心細し、

〔夫木和歌抄十名所歌中〕

ふじのねのすそのをかけてなくしかの聲もあらしにうき島が原

爲實卿